



感動そして学び

～2016ひろしま総文とアフィニス 夏の音楽祭～

広島なぎさ中学校・高等学校
教諭 藤原 譲治

はじめに

広島なぎさ中学校・高等学校管弦楽部は年間を通して様々な場で演奏活動を行っている。今回は平成28年度携わった2つの大きなイベントについて紹介したい。

2016ひろしま総文を振り返って

平成28年夏、「第40回全国高等学校総合文化祭 2016ひろしま総文」が広島県にて開催された。

「器楽・管弦楽部門」では、県下6校が合同チームを形成し、「広島PEACEオーケストラ」として参加した。大会は大成功裡に終わったが、本校の生徒にとってその感動がひとしおのものであったのは、単に演奏に参加できたからではない。私が「器楽・管弦楽部門」の代表委員であったため、本校は大会運営における基幹校だった。そのため本校の生徒は本大会の2年前から準備に携わり、大会運営の重要なセクションにおいて中心的役割を果たしたのである。

全国高等学校総合文化祭とは

全国高等学校総合文化祭(高校総文)は、毎年8月、開催県に各県代表の文化部の生徒が集結し、芸術・文化を披露する大会で、文化部のインターハイとも言われる。ひろしま総文は計25の部門で開催され、参加者は2万人を超えた。

この大会の大きな特徴は、生徒による準備、運営が行われるということである。「器楽・管弦楽部門」もプログラムの作成から受付、司会進行、楽器搬出



本大会で全国の生徒の前で挨拶をする生徒実行委員長三浦玲央奈(最前列)

入など15のセクションを設け、いずれのセクションにおいても、最初に動くのは、基幹校である本校の生徒だった。

特に、中心になるのは生徒実行委員である。実行委員は各部門10名が本大会の1年前に教育長からの委嘱を受け就任する。本校からは2名が委嘱を受け、そのうちの1人である三浦玲央奈(当時:高3)が実行委員長を務めた。

ひろしま総文に向けて準備が始まる

これほどの大きな大会であるため、その準備は各部門平均して2年前から開始する。平成27年の「2015滋賀びわこ大会」には、実行委員も視察に赴き、三浦は次期開催地代表として挨拶を述べた。大会運営のノウハウを先催県からみっちり習い、本大会に向け1年間かけて準備を進めるのは並大抵のことではない。しかも、県内から集まってくる高校の運営生徒を束ね動かさなくてはならない。

だが、本校の生徒ならできると思った。なぜなら、本校管弦楽部では最大のイベントであるスプリングコンサートをはじめ、すべての年間行事の運営を、日常的に生徒中心に行い成功させているという実績があったからである。

大会の基本方針には「主体的・積

極的に考えながら運営に挑戦することを通じて、大きな責任感や深い達成感を味わうことで、自律性を獲得することができる大会」とあるが、本校の生徒なら他校の生徒と協力して素晴らしい大会を作り上げることができると確信していた。

困難を乗り越えて

実際には予想以上に作業量が多かった。タイムテーブル、プログラム内容確認、司会、舞台配置転換、楽器置場配置、受付、楽器運搬、駐車場、昼食弁当、昼食場所、スタッフ飲料、掲示物準備など挙げれば切りがない。だが、生徒たちは5年生(高2)を中心にいくつかのグループに分かれ忍耐強く作業を進めていった。

作成したものは各セクションで2人以上によりチェックを行い、重要なことに関してはすべてを統括するリーダーグループでもう一度確認を行った。

私は代表委員として、仕事の負荷が一部に偏らないように気を配ったり、係間で常に連絡を取り、連携するよう指示をしたりしたが、多くは生徒たちが自ら主体的に動くことで乗り越えることができた。

もちろん、失敗もたくさんあったが、それを補ってあまりある仕事を部員たちはこなし、見事な大会運営と、全国から広島を訪れた高校生への心温まる「おもてなし」によって「ひろしま総文」を大成功に導いたのである。

もちろん、運営だけでなく演奏においても本校生徒は活躍した。「広島PEACEオーケストラ」のメンバー110

名のうち、28名が本校の生徒であり、オーケストラの代表は三浦の後を継いだ部長石川愛海(当時:高2)が務めた。運営、演奏ともに本校生徒の頑張り活躍が目覚ましかった。だからこそ、大会を終えた生徒たちの感動は言葉にできないほど大きかったのである。



生徒交流会の様子

管弦楽部員の感想

「演奏終了後、客席からたくさんの拍手が聞こえ、その瞬間、このオーケストラのために頑張ってきて本当に良かったと心から思えました」(高2女子)

「私はステージ係として舞台袖にいました。その時に見た出演者の方々のキラキラした目を見たときに総文を裏方で支えられてよかったと思ひ、言葉にできない達成感が湧いてきました。閉会式で大会テーマ曲を演奏しているとき、終わってしまうという寂しさとたくさんの出演者



次回みやぎ総文2017生徒実行委員会の皆様と



広島PEACEオーケストラ

の方々の顔が思い浮かんで涙が止まりませんでした」(高1女子)

指揮者 秋山和慶氏との関わり

広島で2年に一度、8月下旬に国際音楽祭「アフィニス夏の音楽祭」が開催される。欧米から第一線で活躍している音楽家や国内のオーケストラ・プレイヤーが集まる大変刺激のあるイベントであるが、この音楽祭に本校管弦楽部は平成23年から関わらせていただいている。参加アーティストとともに活動するだけではない。秋山和慶氏の指揮のもと、オーケストラクリニックや指揮クリニックのモデルオーケストラとして活動させていただいているのである。

そうした縁で、平成29年3月30日にNHKで放送されたドキュメンタリー番組「ラストコンサート～秋山和慶 広響と歩んだ20年～」に出演することになった。この番組は秋山氏が広島交響楽団の音楽監督を退任され桂冠指揮者となられるのに合わせて制作された番組である。

番組の中では、秋山氏が本校を訪れオーケストラの指揮をし、秋山氏の指導前と後で生徒たちの演奏がどのように変わっていくかがドキュメントされた。

「指揮」という行為はオーケストラの音に与える影響が非常に多大で、その分責任も大きい。生徒たちは自分たちが発する音が秋山氏の指揮によって瞬時に変わること驚きを感じていた。本物の優れた芸術家に直接指導を受ける貴重な機会となった。

管弦楽部員の感想

「秋山先生が指揮棒を振り下ろされた瞬間に感じたことは、全員の呼吸が合い、最初の音の広がり方が普段の合奏とは全く別のものになっていたことです」(高1女子)

「指揮が変われば音が変わると言われていますが、実際そのとおりで自分の出している音なのに驚いてしまいました。まるで勝手に出ていく音のようで、これが本物かと思ひ感動しました」(高1女子)

「最後に秋山先生のお話を聞いて、今当たり前のように音楽ができていたことはとても幸せだと感じました」(高1女子)



ドキュメンタリー撮影風景

撮影が終わった後、秋山氏から、「また是非振らせていただきたい」という御言葉をいただいた。

今年の夏に開催される、「アフィニス夏の音楽祭2017」で再び共演、ご指導いただくこととなっている。

おわりに

現在、管弦楽部はこの夏開催される「みやぎ総文2017」参加に向けて準備を進めている。恵まれた環境で活動できることを感謝しつつ、さらに高みを目指していきたい。